

都筑道夫自選傑作短篇集 一九七六年六月一〇日 第一刷 定価九八〇円

著者／都筑道夫 ©Michio TSUZUKI 1976 装幀／池田拓

編集人／酒井堅次 発行人／二宮信親

発行所／読売新聞社

〒二〇〇東京都千代田区大手町一―七―一 〒五三〇大阪市北区野崎町七七 〒八〇二北九州市小倉北区明和町一―二―

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／ナシヨナル製本 0393-206430-8715
△落丁・乱丁本はおとりかえします▽

都筑道夫・自選傑作短篇集／目次

キリオン・スレイの生活と推理
溶けたナイフ 7

空腹幽霊 29

退職刑事

写真うつりのいい女 51

四十分間の女 75

十七人目の死神

はだか川心中 97

ハルピュイア 107

風見鶏 129

怪談ショート・ショート

人形の家 143

かくれんぼ 153

古い映画館 163

なめくじ長屋捕物さわぎ

天狗起し 173

小梅富士 197

春色なぞ暦

羅生門河岸 221

藤八五文奇妙！ 249

花川戸心中 275

作家アルバム・ある日ある時 307

自作解説・私の推理小説作法 319

都筑道夫・自選傑作短篇集

キリオン・スレイの生活と推理

溶けたナイフ

「人間の指で、人間が刺しころせる、と思いますか、キルさん？」

と、水菓子屋の若旦那がいった。

「刺しころす？ 突きさして、殺すこと？ 指というのは、この指？」

キリオン・スレイは、かなり上達した日本語で聞きかえしながら、ひとさし指だけ立てた右手を、相手の鼻さきで大きくふった。

「そう。この指ですよ」

と、水菓子屋の若旦那も、左手のひとさし指だけを立てて、ふってみせた。右手は、水わりのグラスをつかんでいる。

「だれかが、だれかを指で突きさして、殺した、というのですか？ それ、ほんとうですか？」

ちょうどそのとき、前に運ばれてきたスパゲッティのフォークを、とりあげようとししないで、キリオンは相手の

1

顔をのぞきこんだ。

「ほんとうですよ。そういうことに、なってるんです。事実、そうとしか考えられないんですよ。部屋のかなに、胸を突きさされた死体がころがっていて、そばに犯人が立ってたんですからね。けれど、どこにも刃物がない。部屋には内がわから、掛金がかかっていて、窓の外にはひとがいた。死体といっしょにいた男は、警官に聞かれると、自分が殺したと返事をした。刃物はどこへやった？ と聞かれると、そんなものはない。指で刺しころしたんだ、といったんですから」

と、若旦那は手ぎわよく要約した。

「アイ・スィー。カラテね？」

キリオンは、右手を手刀のかたちにして、突きさすまねをしてみせた。その声の調子には、興味をうしなったようなところがあつた。

「ノー、ノー」

と、相手は大きく首をふって、

「死体の胸の傷は、あきらかにナイフで刺したもののなんですよ。刃の長さが二十センチはあろうという」

「ナイフで刺した傷。そのナイフがない。ドアには鍵。窓にはひと。ロックト・ルーム・マードー！」

キリオンの声には、最初よりも濃厚な興味があふれていた。

「すごい！ もっとくわしく、聞かしてくれませんか」

「それなら、わたしよりも、こちらのほうが適任ですよ。

なにしろ、こちらのマンションの隣りの部屋で起った事件なんですから」

と、若旦那は、目顔でカウンターのすみをさししめした。そこには、黒いタートルネックのスウェーターを着た女が、ウイスキー・コークのグラスを前に置いて、ひっそり週刊誌のページをめくっていた。

「織本さん、こちら、ミスタ・キリオン・スレイといつて、詩を書いてる方なんですがね。犯罪にも興味を持って、実際に事件を解決なすったことも、おありなんですよ。例の話をしてあげてくれませんか？」

と、若旦那がいうあとから、キリオンも頭をひょこっとさげて、

「前にもここで、あったことがありますね。話してください、お願いします」

そのときドアがあいて、雪雨といっしょに客がひとり、入ってきた。時間は、午後十一時五十五分。場所は、国電目白駅のプラットフォームとおなじ谷間にある小さなスナ

ック・バーだった。

入ってきた客は、キリオンの肩越しに、まだ半分ほど残っているスバゲッティの皿をのぞきこんで、かすかに眉をひそめながら、

「まさか、ふた皿めじゃないだろうな、キル？ とすると、いやだぜ、おい。ウォーター・ケイク氏が、なにか犯罪に関する珍らかな話でも、持ちだしたんじゃないのか？」

と、早口の英語でいった。ウォーター・ケイク氏というのは、水菓子屋の若旦那のことだ。この二十六歳の青年には、ちよつと古風な気どりがあって、くだもの屋の若主人、と紹介されると、

「水菓子屋です」

と、訂正を申しこむ。この店で、キリオンに紹介されたときも、

「ミズガシヤですよ。わかりますか？ バナナでも、リンゴでも」

と、カウンターのガラス鉢に盛ってあったやつを指さして、

「東京では昔から、ミズガシというんです。ウォーター・ケーキですね」

それを、キリオンはおもしろがって、以来、この青年のことを、ウォーター・ケイク氏と呼んでいる。

「あたったよ、トニイ」

と、キリオンは新来の客をふりかえった。客は青山富雄だった。

「ワカダンナの今夜の話は、すごいんだ。密室殺人だよ。もつとも死体といっしょに、犯人は発見されたんだがね。凶器が消えてるんだ」

と、キリオンはつづけた。

「たしかに、密室殺人の変型だな。けれど、キル、今夜のきみは、そんな話に夢中になっちゃあ、いられないはずだろう？ ちょっと腹ふさげをしたら、帰って仕事をするんじゃないかったかな？」

と、富雄は顔をしかめた。

「原稿なら、大丈夫だよ。せっかく、こちらのお嬢さんが、くわしい話をしてくれるとこなんだから、いま立っちゃあ失礼だ」

キリオンは、タートルネックの女のほうに、軽く顎をしゃくった。

織本さん、とウォーター・ケイク氏に呼ばれた女は、顎鬚のはえそろったアメリカ人と無精鬚のびかけた日本人

の英語のやりとりを、なんとなく落着かない様子で、ながめていた。青山富雄も、この店でなんとか顔をあわしたところのある女なので、会釈をしてから、

「しかたがない。話を聞くだけだぜ」

と、キリオンにいつて、ストウールに腰をおろした。キリオンはアクセントのあやしい日本語で、

「邪魔がはいって、ごめんなさい。オリモトさん、いいましたね？ 友だちのトニイにも、話を聞かせてやってください」

「でも、くわしくなんて、知らないんですよ。それにもう、わたくし、なんども話をさせられたんで……」

と、女は迷惑そうだった。

「いいじゃありませんか。隣の部屋で起ったのは、事実なんだし……」

と、ウォーター・ケイク氏がおるようにいった。キリオンもうながすように、

「場所はどこなんです？」

「この先の北見マンションですの。マンションといつても、三階建ての……ふつうのアパートですけれど」

と、女は話をはじめた。

「知ってます。知ってます。曲り角の新しい建物」

「キリオンがうなずくと、富雄も興味を持ちましたらしく、

「ああ、あの事件ですか。先おとといの晩でしたね？ 殺されたのは若い女性で、CMタレントだったか、ファッション・モデルだったか……」

「ええ、CMにも、週刊誌のグラビアにも、出たことがあるんですけど、それほど忙しくはなさそうでした。水が渡ると書いて、ほんとにスイトと読むんですって。でも、自分でもミズワタリといっていました。水渡順子というんですの」

「それが、殺されたひとの名前ですね？」

と、キリオンが口をはさんだ。

「そうなんです。細い露地のほうの側の奥から三つめの部屋——二階ですよ。そこにひとりりで住んで、わたくしの部屋は二つめなんです。先おとといの……ちようどいまごろでしたわ。お隣りで、妙な音がしたんです。重いものが倒れるような——その前に、順子さんの声もしました。

なにかいいあらそっているような、低い声でしたわ。相手の声は聞えませんでしたけれども、つづいて妙な音でしゅう？ 気になって、廊下へ出てみたくです。お隣りのドアの前に立ってみると、もうなにも聞えませんが」

女はその晩のことを、体験しなおしているみたいに、ちょっと肩をふるわせてから、低い声でつづけた。

「でも、ドアをノックしても、名前を呼んでも、返事がないんです。そのかわりに、『畜生』という声が、聞えしました。男の声でしたわ」

「はつきり聞えたんですか、それ？」

と、キリオンが念をおした。女は軽く首をふって、

「実をいうと、畜生か、百姓か、縁青か、よくわからなかったんです。たぶん畜生だろう、と思っていましたら、窓の下にいたひとたちには、はつきり『畜生！』と聞えたそうです。ですから……」

「窓の外にいたひと、というのは、ひとりじゃなかったんですか？」

「三人いたんです。屋台の——」

「待ってください。それは、あとにしましょう。あんたが実際に経験したことを、さきに聞かしてくれませんか」

「そんな声がしたもんですから、わたくしが迷っていますと、左どなりの部屋のご主人が出てきました。ふたりで声をかけましたら、おむかいの部屋の学生さんも、出てきました。そして、ドアのチェーンをはずす音がして……」

「それまでは、セフティ・チェーンがかかっていたわけ

すね？」

と、キリオンがまた口をはさんだ。

「そのようでしたわ。鍵はかかっていなかったように思うんです。声をかけてノブをまわしてみたときの感じでは——わたしだけでなく、左どなりのご主人も、そういうっておいででした」

「それで？」

「ドアをあけたのは、男のひとなんです。いきなり血だらけの片手をあげて——わたし、悲鳴をあげかけたらしいんです。それを、鎮めようとしたのかも知れせんわ。とにかく、しわがれた声でいったんです。その男のひと。『もういいんだ。なにもしないから、警察を呼んでくれ。あんたがたは、なかへ入らないほうがいい』って——『素晴らしいながら、男のひとが横に動いたんで、奥の部屋に順子さんが、倒れているのが見えました。わたくし、もう膝ががくがくしてしまって、立っているのが、やっとでしたわ。』

『おれが殺したんだ』って、男のひとはいいました。『間がわるかったよ。窓の下には、おでん屋がいやがる』っていつて、笑ってました。頬をひくひくさせただけなんですけど、あれ、笑ってみせたんだと思うんです」

「オデンヤ？」

と、キリオンがつぶやいた。女は当惑したように、

「おでん屋って、あの——」

「知ってます。食べます。ツミレ、コンニャック、ガンモ、スージー、ダイナマイト。好きですよ。ヤタイのオデンヤ、いたんですね、窓の下に？」

「そうなんですよ」

と、話をひきとったのは若旦那で、

「ちりんちりんベルを鳴らして、この前をよく通っていくおでん屋ね。あれが、ちょうど窓の下にいたんです。客がふたり。ひとりとは、わたしとこの近くのクリーニング屋の店員でしてね。そいつの話じゃ、頭の上で窓のあく音がして、『畜生！』って男の声がしたそうです。しばらく窓はあいたままで、それがしまったと思ったら、間もなくバトカーのサイレンが聞えたそうで」

「男のひとは、ドアをあけっぱなしにしたまままで、窓をしめると、順子さんのそばにすわって、うなだれていました」

と、女がつづけた。

「わたしはものをいうことも、動くこともできなくて、左どなりのご主人の肩につかまって見てたんです、おまわりさんが来るまで」

「窓をあけたのは、オデンヤがいなかったら、飛びおりる気だったんでしょうか？」

と、キリオンが聞いた。

「きっと、そうだと思います。二階といっても、そんなに高くはありませんし、窓には植木鉢をおけるくらいの出っぱりがあつて、手すりがついてるんです。その手すりにぶらさがつてから、手を離せば、わたしでも楽に飛びおりられるでしょうね」

「なるほど——それから？」

「それから先は、わたくし、よく知らないんです。刑事さんには、いろんなことを聞かれましたが、なんにも教えたくれませんもの」

「さる筋から、聞きこんだところじゃあね」

と、また若旦那が話をひきとつて、

「バトカーの警官がまず、『あんたがやったのか？』と聞いたら、男は『そうだ』と答えたそうです。次に『凶器はどこにある？』と聞くと、『凶器はこれだ』と血まみれの右手のひとさし指を立てて、『この指で刺しころした』といったそうですよ。でも、死体を見ると、刃物で刺したにちがいない。『窓から棄てたのか？』と聞くと、『おでん屋が下にいる。おれがなにか投げだしたかどうか、聞いてみ

たらいいだろう』という」

「つまり、棄てていなかったわけですね？ もちろん、部屋のなかからも、見つからなかったんでしょう？」

と、目をかがやかして、キリオンが聞いた。ウォータ・ケイク氏はうなずいて、

「刑事がやつきになって、それこそ畳まであげて、探したそうですがね。傷口にあうようなナイフは見つからない。男はそれきり黙秘権、名前もいわないって話ですよ」

「トニイ、聞いたかよ」

と、うれしそうに英語でいいながら、キリオンは、富雄の背を平手でたたいて、

「完全な変型密室だ。犯人がいる。犯行はみとめた。しかし、凶器がない。これじゃあ、どんな鬼検事だって、この謎をとかないかぎり、犯人を有罪にやあできないぜ」

2

スナック・バーで、凶器消失の話を聞いたあくる日、「なんとか都合をつけて、いっしょに来てくれないか、トニイ？」

と、キリオンは富雄に申しでた。